

翻訳

環境的自叙伝

クレア・クーパー・マーカスⁱ 著, 永橋 爲介ⁱⁱ 訳

【訳者解説】本稿の原著論文は、クレア・クーパー・マーカス (Clare Cooper Marcus), 'Environmental Autobiography,' Working Paper 301, January 1979, University of California, Berkeley であり、同学部図書館に所蔵されている。マーカス氏は、1969年から1994年までカリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部で専任教員として活躍し、現在、同校名誉教授。ロンドン大学地理学科卒業後、ネブラスカ大学で地理学修士号、カリフォルニア大学バークレー校で都市計画学修士号を取得。日本で翻訳、刊行された著書に『人間のための住環境デザイン—254のガイドライン』（湯川利和：翻訳、鹿島出版会、1989）、『人間のための屋外環境デザイナー—オープンスペース設計のためのデザイン・ガイドライン』（湯川利和・湯川聡子：翻訳、鹿島出版会、1993）がある。訳者である永橋は、在外研究の機会を得て、2012年秋セメスターから2013年春セメスターにかけて同校に客員研究員として滞在し、マーカス氏が開発、展開した「環境的自叙伝」やその応用例について、意見交換の機会を得た。「環境的自叙伝」という手法は、日本国内では、浅海・伊藤・狩野『参加のデザイン道具箱』（世田谷まちづくりセンター、1993）26-27頁、ランドルフ・ヘスター（著）・土肥真人（訳）『まちづくりの方法と技術』（現代企画室、1997）32-33頁で、その手順が紹介されている。しかし、このワークのそもそもの目的や意図、その効果・効用についての全容は紹介されてこなかった。マーカス氏との対話から、「環境的自叙伝」の全容紹介の必要性を感じ、マーカス氏の同意を得て、今回、翻訳の運びとなった。日本における「環境的自叙伝」の応用例としては、例えば、拙著「環境教育の実践」（『住宅会議』第70号、2007）17-21頁を参照されたい。

一「自分らしく」いられる空間についてのトポアナリシス（場所分析）を始めよう。（中略）自分が歩いた道、十字路、そして道端のベンチについて、一人一人が自分の言葉で語ることが重要だ。今は失われてしまった野原や草原についての測量図を作るのだ。¹⁾

ガストン・バシュラル『空間の詩学』

数年前にガストン・バシュラルの『空間の詩学』を読んだ。バシュラルは、トポアナリシス

（場所分析）の重要性を提起していた。過去の環境体験や居住体験の分析は、自分自身をさらに深く理解することに役立つという。私はこの提起に深い感銘を受けた。私自身、子どもの頃過ごした田舎での自由な生活を懐かしく思い出すことがよくあった。木の上に家を作ったこと、トンネルを掘ったこと、畑からくすねたジャガイモを焚き火で焼いて食べたこと。。。そんなことをあれこれ思い出していると、こうした子ども時代の経験があったからこそ、私は、「都市における子ども達の問題意識を持ち、今の研究・教育活動をはじめたのだ」と思い至った。私はカリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部ランドスケープ・デザイン学科の同僚、ロビン・ムーア教授と共に

i カリフォルニア大学バークレー校環境デザイン学部名誉教授

ii 立命館大学産業社会学部准教授

に、デザインを学ぶ学生達に子どもの頃の環境を絵や地図で表現してもらおうワークを始めた。描いたものを紹介し、思い出の場所に対する気持ちや気づきも共有してもらおう。これは、自分の内面を他者に開いて見せ、相互理解を深める貴重な機会として成功をおさめた。さらに『『秘密の場所』『何もない場所』『何もデザインされていない素朴な場所』が子どもの頃の一番懐かしい場所として思い出されるケースが多い（このワークで描かれた大概の場所がそうした場所だ）。だとしたら、私たちは、公園や遊び場をデザインするプロとして、一体何をしていることになるのか？』といった「問い」についても、創造的かつ活発に議論しあえるようになった。子ども達が自由に遊べる「何もデザインしない」場所をわざと残しておく、というアイデアについても議論した。また、田舎に住む子ども達がごく当たり前を楽しんでいる基地づくり、焚き火を使った簡単な料理遊び、どろんこ遊びや穴ほりなどを、空間的かつ制度的に保障する「冒険遊び場」づくりについても語り合った。

ゼミやデザイン実習における学生達の反応はとても高かった。このワークは、ただ単に楽しかったり、自分と他者を深く理解したりする機会となるだけでなく、デザイナーとしての在りようを深く理解する重要なきっかけにもなったのだ。私は、このワークを「環境的自叙伝」と名付け、心の中にある「今は失われてしまった野原や草原」を丁寧に振り返られる半構成的プログラムとして練り上げた。本稿は、その経験と結果を共有することを目的としている。

環境デザイン学部の学生は、卒業後、プロのデザイナーとなり、自分とは異なる境遇の人達のための「場所づくり」に人生を費やすことになる。高齢者、入院患者、大会社の社長といった人々のための場所をデザインする場合、当事者の思いを汲み取ってデザインすることはどこまで可能なのだろうか？自分自身の経験に頼るだけでは限界がある。それゆえ、人間環境学、環境心理学、環境社会学という領域が誕生し、一般ユーザーに関するデータを収集、分析

し、実際のデザインへと翻案されるようになった。しかし、それでもまだ不十分だ。デザイナーは、最終的には紙の上に自分の手で線を引かなくてはならない。たとえ、ユーザーニーズに関する客観的なデータに基づいているといっても、最終的にできあがってくるカタチには、デザイナー自身の過去や経験が色濃く反映されている可能性がある。心理療法家は、自らの感情を無垢なクライアントに「重ね合わせて」しまわないよう、自分の感情やその傾向を十二分に理解するトレーニングを欠かさない。デザイナーにも同様のトレーニングが必要だ。デザイナー自身が体験してきた環境を、過去に遡り、しっかりと振り返ることは、とても重要なことではないか？自分の感情の在りようや性格は、人格形成に重大な影響を与えた過去の人間関係の分析を通してある程度把握し得る。それと同じように、自分に大きな影響を与えた場所や空間の履歴を把握することで、環境に対する好みやその傾向を、さらに深く理解できるようになる。私は、この「環境的自叙伝」というワークを本当に重要なものだと考えている。多くの学生が、「自分自身の生活を振り返ることに学術的な意味があると今まで教えてもらったことはなかった」と口にする。そして、これまで書いてきたレポートの中で、「環境的自叙伝」に関するレポートがもっとも難しく、しかし、もっとも自分のためになったレポートだと語るのだ。

このワークを行う際、私は、学生達を空想の世界に連れ出し、子どもの頃を思い出してもらおう。そして、その思い出を絵に描いてもらおう。この「環境的自叙伝」は、パークレーで環境デザインを学ぶ学生にはすんなりと受け入れられた。しかし、1973年、オーストラリアのシドニー大学に客員教授として滞在した際、建築を学ぶ男子学生達に同様のワークを行った時には、軽いパニック症状を起こす学生や、ひどく狼狽する学生が現れた²⁾。それゆえ、このワークをスムーズに開始する方法を考え出す必要があった。私が見いだしたのは、静かな時間を少しとり、学生達に深呼吸を繰り返してもらうことで、普段の

学術的、論理的な思考方法から自分を解放し、空想の世界にゆったりと身を委ねてもらう方法だ。具体的には、次のように誘導していく。

1人で野原や草原の中を歩くところを思い浮かべて下さい。そこはとても温かで、あなたはワクワクした気持ちになっています。あなたのまわりには誰もいませんが、とても幸せな気分です（参加者がそうした状況を心の中で実感できるよう、ここで十分な間をとる）。いま、遠くの方から、あなたの方に近づいてくる人影があります。あなたは「いったい誰だろう？」と、少しドキドキして、その人影を見つめています… その人が誰なのか、まだ分かりません… その人影が近づいてきました。子どもです… その子がついに目の前に到着しました。その子は、子どもの頃のあなた自身です… あなたと、子どもの頃のあなたは、一緒に並んで座り、仲良くなります… そして、その子は、あなたの手をとって、空に向かって一緒に飛び立ちます。下に広がるのは、馴染みのある風景です。ついにあなたは、子どもの頃よく訪れた、とても懐かしい場所に降り立ちました… いまや、大人になったあなたは消え去り、子どもに戻ったあなた自身がその場所を歩き回ります… その場所の一番端まで行き、周囲を丁寧に見て回ります… その場所に触れてみましょう。どんな気持ちになりますか？… 何か懐かしい匂いがありますか？何の匂いでしょう？… そこでどんな出来事があったのでしょうか？何か思い出すことはありますか？その場所は、あなたにどんな気持ちを引き起こさせるのでしょうか？… あなたは、誰か他の人と一緒に居ますか？それともあなただけでしょうか？

もっとたくさんの質問をすることも可能だろう。しかし、じっくり考え、ゆっくり思い出すための静かな間（ま）を十分に確保する必要がある。このワークは、内面を深く掘り下げる経験となる。そして、通常の授業では体験できない意識状態へと学生を誘

う。それゆえ、このワークを終えるに際しては、参加者達を、「今ここ」の状態に戻すためのしっかりとした手順が必要になる。1つのやり方として、参加者に、自身が思い出した場所の真ん中にゆったりと寝転んでもらって、その場で目をつむってもらう（参加者にはすでに目をつむってもらっているのだが、空想の中でもさらに目をつむってもらう）。そして10からゼロまでカウントする私の声を聞きながら、参加者は子ども時代の自分と環境に別れを告げ、「今ここ」に意識を戻し、そして、目を開けてもらう。

目を開けた後、参加者には筆記用具を手にとってもらう。そして、空想の中で見た経験したりしたことを（他の誰ともしゃべらないで）絵やスケッチ、地図で表現するよう指示する。15分程、絵を描いてもらった後、描いた場所についての客観的な説明を記述するよう伝える（それは一体どこなのか？何歳頃の思い出なのか？どういう状況なのか？）。その後、自分の主観や感情について記述するよう指示する（その場所ではどんな気分だったか？どんな感情を抱いたか？）。最後に、自分が考えたことや感じたことを他のメンバーと共有するように促す（参加者が少人数である場合）。もし、参加者が大人数であれば、2つか3つの小グループに分かれ、順番に紹介していくように伝える。

この一連の作業を経験してもらった後、このワークが「環境的自叙伝」と呼ばれるものであり、子どもの頃の場所が私たちの原点であることやその重要性について説明する。学生達には、このワークを踏まえて、自分が重要だと思っている過去の環境全てを客観的かつ主観的に振り返り、レポートにまとめてもらっている（より詳細な「レポート課題」の内容については、「付録」を参照のこと）。このワークを始めた頃は、自分が住んできた家だけを思い出してもらっていた。しかし、何年かやってみて、それでは限界があることに気づいた。子ども時代を空想するワークでは、どのクラスでやっても、おそらく学生達の80%以上は屋外環境を思い出す。思春期もしくは成人に達する前の記憶として、家の中のこと

を思い出すということは、この「環境的自叙伝」の中では稀だ。この事実困惑する学生も中にはいるが(特に、建築学科の学生!), 5歳から10歳までの時期は(実際、この年齢の頃を思い出す学生が圧倒的に多い)、いちばん冒険心に満ち、何でも手にして試してみたいと思った時期である。しかし、家の中ではいつも親の目が光っている。そのために屋外で過ごすことが多いのだ。

私は数多くの「環境的自叙伝」に目を通してきた。「環境的自叙伝」には、長期休暇中の屋外環境体験、中でも、大きなリュックを背負って自然の中を歩き回った経験や、自然の中でキャンプをした経験が、後になってランドスケープ・デザインという分野を選択することにつながったという記述がよく登場する。これはとても興味深い。

最近、ランドスケープ・デザイン学科、建築学科、都市計画学科の学生達80人の「環境的自叙伝」に目を通した。そして、自分が住んできた家や隣近所のことだけを尋ねるのはやはり限界があると改めて認識した。およそ半数の学生達は、「祖父の家」や「祖父の家にある自然ゆたかな庭」、「祖父の牧場や農場」を描いていた。そうした場所は、学生達の親が築いた家よりも魅力的で、学生達の価値観に強い影響力を有している。このことに私はとても驚かされたが、おそらく、祖父母を訪問する時は、長期休暇の時期にかさなり、特別な出来事、家族が揃う機会として、特に印象に残りやすかったのだろう。しかし、またこうも言えるのではないか? つまり、昨今の若い学生達の祖父母の世代は、20世紀前半、農村や小さな町に家を建てる場合が多く、その環境は、若い学生達が育った郊外住宅地よりもはるかに魅力的な場所に映ったのではないか?

現在に至る過去の環境をいくつか思い出し、記述した後、学生達には自分が描き出したものを読み返してもらう。そして環境や場所に対する好き嫌いについて何かパターンがあるのかなのか、考察してもらっている。過去の環境経験が、現在の環境に対する価値観とどのような関係があるのか、それを見

つけることがこのワークの眼目だ。環境に対する好みや特徴が、デザイン実習の中で作り上げた作品に、どのような影響を与えているかについても考察を進めてもらう。デザイン活動を始めたばかりの学生にとって、この課題は結構難しい。デザインする上でつまづきや障壁にぶちあたった経験がまだ少ないからだ。それゆえ、このワークは、環境デザイン学部の最終学年か、他の分野から環境デザインに移ってきた2、3年目の大学院生達に対して実施するのが、さらに効果的だろう。

「環境的自叙伝」は、学生達にどんな効用をもたらすのか? まず第1に、このワークは、どの学生にとっても、半構成的な方法で自身の過去を振り返り、過去における大切な空間や場所を描きながら思い返す、初めての経験になるということだ。第2に、現在の自分のデザイン上の流儀や好き嫌い、価値観を分析する機会になる。自分が持っている価値観の土台を理解し、自分自身についてもさらに深く理解する機会となる。第3に、環境や空間に携わる専門職を選んだことに対する論理的な道筋を再認識するきっかけにもなる(「環境的自叙伝」が、読むのにさほど長くなく、また、こちらの精神的負担にならなければ、このレポートを大学院入試に採用したら良いと思う。「私はなぜこの大学院を選んだのか?」というステレオタイプに満ちた志望動機を読ませられるよりは、よっぽど可否の判定材料になる)。

第4に、大学の設計演習や、実際に設計事務所でデザイン活動に従事してきた人達は、自分の作品に繰り返し現れるパターンやモチーフが一体どこからきているのか、このワークを通して理解することになる。例えば、ある女性は、このワークの中で、自分が小さい頃、周りと隔絶した高い塔に憧れていたことを思い出した。そして、彼女の作品の多くに、自邸のデザインも含めて、そのことが色濃く反映されていたのだ。また、祖父の家が大好きだったことを思い出した台湾出身の若い建築家は、古い集落にある祖父の家のいろいろな構成要素が、彼女の作品に何度も使われていることに気づいた。

数年間の設計事務所勤務を経て大学院に戻って来た若いアメリカ生まれの建築家の場合、個人施主のために設計した3軒の家のデザインには、それぞれの設計時点での彼自身の内面がそのまま反映されていた。イランから来た学生は、自分の生まれ育ってきた環境（柱と梁との厳格な配列、左右対称性、噴水のある中庭を囲む家屋）に対するこだわりやジレンマをはっきりと自覚するようになった。設計演習の担当教員からいつも「ここはアメリカなんだから、そんな緊張感に満ちたデザインばかりしないで！」と強く言われていたのだった。

ランドスケープ学科のある女子学生は、一人っ子で、子どもの頃、いつも1人で遊んでいた。そのうち、常に1人でいることを自ら求めるようになったという。彼女がデザインした居住環境には、一人一人が別々に存在するような場所が多くデザインされている。もう1人、別のランドスケープ・デザイナーは、父親が亡くなった後、郊外住宅の広い庭の手入れをしなければならなくなった。一方、彼のデザインする庭や外構には、常に、維持管理のあまりかからない植物が使われている。このワークを通じて、彼は、自分の過去と現在のデザイン傾向との関連をしぶしぶと認めたのだった。

盲目の1人親に育てられた若いデザイナーは、“こざれい”で明快な空間をデザインすることが多い。それは、子どもの頃、家の中がいつも乱雑で、視覚的統一感がなかった子どもの時代の環境に対する反動であると、彼自身が認めた。

「環境的自叙伝」を書き終えたばかりの学生達は、必ずしも幸せそうには見えない。どちらかというと、静かにもの思いにふける感じ、あるいは、何か疑わしげに考え込んでいる感じのことが多い。しかし、多くのワーク経験者全員が、「辛い過去の経験を振り返る場合には戸惑いも感じたが、『環境的自叙伝』を描く価値は大いにあり、本当の自己理解にたどりつくことができた」と語っている。

このワークを小グループ（ゼミ形式）で行い、それぞれが描いた「環境的自叙伝」や、その意味、そ

してそこから導き出された考察を共有することで、参加者は、さらに新しい発見を得る。例えば、一人一人の有している価値観が、どれほど一貫したものか、理解し始める（10週間の授業の内、約7週間目には、それぞれの参加者がどんなことを話すか、誰がどの絵を描いたか、参加者全員がだいたい予想できるようにになる）³⁾。また、例えば、環境への考え方や姿勢に関して言えば、「ランドスケープの学生には、ランドスケープの学生特有の考え方や姿勢がある」、ということも分かってくる。そしてそれは、都市計画学科の学生グループの持つ考え方や姿勢とも全く異なっているのだ。ランドスケープの学生達は、大概、郊外か野生保護区のような場所を「理想的な環境」として描き出し、人間の姿を1人も登場させない。一方、都市計画の学生達は、いつも賑やかなまちなかの生活を理想として描き出す。空間に携わる専門家同士が一緒にプロジェクトを始める場合、理想的な環境像や価値観についての根本的な違いを最初に認識しておくことは重要だ。学生達には、プロのデザイナーになった際、その一部でもいいから「環境的自叙伝」をやってみよう勧めている。

例えば、ここに3人のデザイナーがいて、共同で新しいまちづくりを始めたとする。「理想的な環境」を一人一人描き出し、それを共有することは、相互理解の出発点として有効だろう。1つのチームとして活動していく場合、あるデザイナーは活気ある賑やかな街が理想だと思い、別のメンバーは野生生物のための生息環境保全を重要視し、もう1人の理想が森に囲まれたコミュニティーだったとしたら、その共同作業は、誤解と失望を伴う残念な結果に陥るだろう⁴⁾。そもそもの価値観が明らかに違う場合、チームとしての体をなさず、空中分解することになる。

「環境的自叙伝」の応用例として、例えば、小学校の校庭を改修する際、保護者や学校関係者が集まり、「子どもの頃好きだった場所」を思い出すワークを試みるのも良いと思う。ワークを通じて、子ども時代の最も楽しかった場所は、校庭でもなく、まし

てや子どものために特別にデザインされた場所ではないということを思い出し、少しは冷静な気持ちになれるかもしれない。自分の子ども時代、そして他の人々の思い出やその時の気持ちを否定しようとする人は出てこないだろう（たとえ客観的な「データ」には反発したとしても！）。「環境的自叙伝」は、うまく用いれば、子ども達が本当に望んでいることや必要としていることを理解するのに役立ち、創造的な議論をもたらす。そして、懐かしく思い出された子ども時代の環境や場所に共通する本質的な部分が、校庭改修に活かされる。私たちには全員子ども時代がある。子ども時代に共通する思い出は、子ども達が本当に喜ぶデザインを作り出す原動力になるだろう。さらに、現在の子ども達を取り巻く環境が抱える問題を解決する糸口にもなり得る。

最後に、このワークを導入する教師の方々に一言忠告しておきたい。この「環境的自叙伝」は、他の答案用紙の成績評価と同じようには扱えない。どの人生がA評価で、どの人生がB評価などと判定することは不可能だからだ。その代わり、各自がどれだけ真剣かつ誠実にこのワークに向き合い、取り組んだかを評価することはできる。学生の「環境的自叙伝」を読む教師は、自分もまた、それを読むことで感情が揺さぶられることを覚悟しておいた方がいい。共感が溢れ出てくるのだ。学生達の「環境的自叙伝」を読むたびに、私は、一人一人の人生や記憶、ジレンマに心打たれ、客観的な評価者としての立場を保つことができなかった。「環境的自叙伝」を読み終えると、感動を覚えると共に、沈黙考する時間が必要となった。心が震えるような多様な人生、そして、それにまつわるたくさんの記憶を共有させてもらえる特権的な立場への感謝の念がわき起こる。このワークは、私や学生達の中に、ある心の「痛み」をもたらすこともままある。しかし、それは自分の人生や自分自身をさらに深く理解するためのほんのわずかな代償でしかない。デザイン教育に従事する人は、このワークを実践するべきだし、学生そして教師にとっても実りあるゆたかな経験となる。未来

のデザイナー達が、デザイナーという職能について深く理解する貴重な機会になるのだ。「環境的自叙伝」の着想は、もともとガストン・バシュラルから得たものだ。彼は、トポアナリシス（場所分析）を、“私たちの生と空間が深く交差していることを体系的に探求する心理学”と定義した。この論考の最後に、バシュラルの示唆に富む以下の言葉を掲げておく。

自分自身の存在をはっきりと実感できる時があるとするば、それは、自分の存在を支えてくれる空間の中に、私たちの認識がしっかりと結びつけられる時だ。私たちは、消え去ってしまうことを避けたいと願う。過去の出来事を思い出そうとすると、それが過ぎ去ったことだと分かっている、過ぎ去ってしまうことをほんの少しでも手元に留めておきたいと願うのだ。蜂の巣のような無数の孔の中に、たくさんの「時」が凝縮されている。それが、空間の役割だ。（中略）長く留め置かれたがゆえに固定された「時の流れ」は、空間の中に、そして空間を介して具体的に見いだされるはずだ。無意識はいつも心の底にある。思い出は不動だ。そして思い出と空間とがしっかりと結びつくほど、その思い出は強固なものになる。⁶⁾

付録

「環境的自叙伝」に関するレポート課題

このレポート課題は、人生に重要な影響を与えた環境を振り返ってみることを目的としています。そうした環境にどのような感情を抱いていたのか、思い出してみましょう。そして、その感情と、あなたが今抱いている環境への価値観とが、どのように関係しているのか、考えてみましょう。

私たちはすべからず、「環境に対するバイアス」を有しています。ある場所は好きで、ある場所は嫌

い、というように。特に、他者のために環境をデザイン、計画する人にとって、自分の「環境に対する好き嫌い」や価値観をしっかりと自覚しておくことはきわめて重要です。自覚することで、疑うことを知らないクライアントに対し、デザイナーの持つ「環境への価値観や好き嫌い」を無自覚に重ね合わせてしまうことを防ぎます。適切かつ効果的にクライアントを援助するために、自分の感情構造をしっかりと理解しておくことが心理療法家にとって不可欠だと言われています。同じように、デザイナーにとっても自分と環境との関わりを深く理解し、そして、それが自分の行動や感情にどう影響しているかを理解することが不可欠になります。どのような環境に、どのような感情を抱くかについての善し悪しは問題ではありません。まずは「環境に対する感情」を顕在化させ、自覚することが重要なのです。このレポート課題では、みなさんに、この作業をしてもらいます。自分の過去を丹念に掘り起こし、その結果、思い出したもののの中には、みなさんに苦痛をもたらす記憶もあるかもしれません。そのような時には、そうした自分の感情とじっくり向き合ってみて下さい。そして、誰か本当に親しい人と、ふさわしい場所で、その感情を共有してみてください。その経験もこのレポートに記述されると良いと思います。

方法

まずは、クラスの中で空想しながら思い起こした子どもの頃の環境から記述していきましょう。最初は、客観的に、「そこはどこなのか？」「どんな場所なのか？」「誰が一緒に居るのか？」などを記述して下さい。そして、その場所についてどのような感情を抱くか（ポジティブなものか、ネガティブなものか）、自分が感じたことを書き出してみましょう。場所に関する記憶は、その場所で一緒にいた人々の記憶とも密接にからみあっています。一緒にいた人々についても必ず説明を加えて下さい。しかし、このレポート課題の一番の目的は、あくまでも場所

に対するあなたの感情や反応を想起し、自覚することです。そのことを忘れないで下さい。

あなたの人生にとって重要だと思われる他の環境についても全て思い出し、客観的に記述した後、自分の感情や考えたことを主観的に記述してみてください。何を重要だと思うかについては、あなた自身に委ねられています。ちなみに、私にとって「重要な環境」とは、それを考えることで、何かしらの感情（ポジティブなものであろうとネガティブなものであろうと）が自分の中にわき起こり、今でも同様の感情や反応を自分に抱かせるようになる「環境」のことです。

あなたが思い起こし、記述した「場所」は、次に示したいずれかに該当するかもしれません。

—あなたが住んでいた家

—あなたが訪れたことのある友達の家や親戚の家

—あなたが住んだり、訪れたりしたことのある地域
—普段の遊び場や、勉強していた場所、長期休暇を過ごした場所、もしくは、本か何かで読んだだけで実際には訪れたことのない場所

—あなたが通っていた学校

—あなたが観光客として訪れたことのある町や田舎、風景

補足 上記以外のことも頭に思い浮かんだとしたら、それも記述するように！

もしあなたが子ども時代からずっと同じ家で育ったとしたら、家の周辺の環境について、年齢が上がるに従ってあなたの活動範囲（テリトリー）がどのように広がっていったか、略図込みで記述して下さい。そして、自分の活動範囲の拡大について抱いていた感情も記述して下さい。

レポートの内容

このレポートには、子ども時代の環境、そしてそ

れとは別に、あなた自身が紹介したいと感じた環境についての説明を記して下さい。あなたが説明しようとする場所全てを絵で表現する必要はありません。でも、絵として描き出してみると、ただ座って思い起こそうとするよりも、それが引き金になって、記憶がより鮮明になることがあります。

レポートを完成させる前に、あなたの「理想的な環境」を絵にして表現してみましょう。家の間取り図でもいいし、風景画、ラフなスケッチ、ダイアグラム図など、やりやすい方法で表現してもらってかまいません。家を描く場合には、その内側と外側も描き、近所さの様子やその位置関係も分かるようにして下さい。なお、すべてA4用紙を使うように。

最後に、もっとも重要な作業があります。環境に関するこうした全ての経験が、あなたにどんな影響を与えてきたかについて、以下の項目について可能な限り分析してみましょう。

- (1) あなたの現在の環境に対する好き嫌いや価値観と、過去の環境体験との関係について。まずは「あなたの現在の理想的な環境」の分析から始めて下さい。
- (2) あなたが環境デザイナー／都市プランナー／研究者という職能を選んだことに対する、過去の環境体験の影響について。（もしかしたら影響はないかもしれません。いずれにしても、一度分析してみてください。）
- (3) あなたがデザイン実習や事務所で手がけたデザインに対する過去の環境体験の影響について。

以上の分析は、とても重要です。しかし、容易に達成できる作業ではありません。決して簡単ではありませんが、今期セメスターの中であなたが手がけるレポートの中では、最も重要かつ啓発的なものと

なるでしょう。

以上

註（原註・訳註）

- 1) （訳註）ガストン・バシュラール（著）・岩村行雄（訳）『空間の詩学』（ちくま学芸文庫、2002）では55頁ならびに56頁に該当する。本稿では、マーカス氏が原著論文で引用している英語版の当該箇所を新たに翻訳し直した。
- 2) （訳註）原著論文では元々「シドニー大学の学生達」としか記述されていない。2013年3月3日、マーカス氏とパークレー市内で「環境的自叙伝」に関する意見交換を行った際、この記述箇所についてマーカス氏に質問したところ、(1) マーカス氏は1973年にシドニー大学に客員教授として滞在、(2) その際、建築を学ぶ男子学生達と「環境的自叙伝」のワークを行ったこと、の2点を把握し、今回の翻訳においてそれらの情報を加えた。なお、シドニー大学の男子学生が「環境的自叙伝」に抵抗を示した理由として、マークス氏は「当時は理解できていなかったのですが、その後、オーストラリアの男性社会がマッチョ社会であることが分かった（今も多分にそうですが）、他の男子学生の前で自分の繊細な感情を吐露しにくいという心理的葛藤があったと推測しています」と述べられている。また、マークス氏からは、EDRA (The Environmental Design Research Association: 訳註：環境デザインや環境心理学に携わる研究者、実践家が集う学際的国際会議。<http://www.edra.org/>を参照)の中で、この「環境的自叙伝」に関するシンポジウムを1980年代初頭に開催したときのエピソードをうかがった。シンポジウムでは、ある大学の心理学部教授から「心理学部の学生に対してこのワークを実施したところ、子どもの頃の児童虐待を受けた記憶を誘発する学生が多く、学生達から苦情があったため、このワークの継続をもう断念しようと思う」という報告があったという。このエピソードを語られた後、マークス氏は、「私の経験では、シドニー大学では拒否反応がありましたが、その経験を活かして空想的想起法を導入して以来、このワークを実施した環境デ

ザインの学生達から拒否反応が起きたことはありません。もしかしたら、辛い記憶を呼び起こした学生もいたかもしれませんが、そのことでパニックを起こしたり、苦情を訴えたりした学生はいなかったのです。学生、院生のほとんどが、このワークで、自分のデザインに対するこだわりやしがらみが明らかになったということに価値を見いだしていました。もっとも、心理学部の学生に対してこのワークを実施することは、ランドスケープや建築、都市計画を学ぶ学生達に実施するよりも簡単なことではない、と言えるかもしれません。心理学部の学生の中には、自分の心理や生育環境になんらかのこだわりや痛みがあって心理学部を選択した人もいるでしょうし、このワークはそのこだわりや痛みを掘り起こしてしまう可能性があり、それゆえに拒否反応を起こす学生もいたのだと思います」と述べられている。本原著論文の中でも、この「環境的自叙伝」というワークを通じて過去の「痛み」に向き合うこと、そして「痛みに向き合っても、そのことで得られる意義や価値」が述べられている。もっとも「過去の記憶を呼び起こす行為」がきわめてデリケートな行為であり、留意すべき事項が厳然と存在することについてはマーカス氏も訳者との対話の中で言明されている。この「過去の記憶の呼び起こし方」や「呼び出すことに伴う痛み」、「痛みとの向き合い方（向き合うことで何が得られるのか？向き合うことにどのような意味や意義がワークの当事者にとってあるのか？あるいは、どんな場合には無理に向き合う必要がないのか？）」については、訳者自身においても今後の検討課題としたい。なお、「環境的自叙伝」という方法論には、心理療法家への言及や、空想的想起法など、心理学や心理療法からのアプローチが垣間みられる。マークス氏は、心理学の学位は有していない。しかし、1960年代から70年代のカリフォルニアにおいては、様々な分野で人間応用心理学への関心が高まり（環境心理学という分野も1970年代のアメリカで大いに興隆し、マーカス氏もその最先端にいた）、

彼女自身、サンフランシスコ・ユング研究所や、カリフォルニアにおける心理療法（サイコセラピー）の研修拠点である Esalen Institute で心理学や精神分析、心理療法に関する研鑽を積んだという。後述するマークス氏の著書、*House As a Mirror of Self : Exploring the Deeper Meaning of Home* (1995) では、サンフランシスコ・ユング研究所前所長（当時）の James Yandell 氏が序文を寄せ、マークス氏が心理学・精神分析・心理療法と環境デザイン学とをつなぐ架け橋として重要な役割を果たしたことを賞賛している。

- 3) この授業は『Landscape Architecture 240』という大学院生向けのプログラムであり、「デザインにおける個人的な価値観」を扱っている。10人の大学院生が1週間に1回、例えば、子ども時代を空想的に振り返る実験的なワークを実施し、だんだんと、環境に対する自分の価値観を明確にしていく。この詳細については、また稿を改めて報告する（訳註：マーカス氏は、「環境的自叙伝」の効用や意味、意義とその応用例に見られる知見についてさらに考察を深めた *House As a Mirror of Self : Exploring the Deeper Meaning of Home* を Conari Press から1995年に出版されている）。
- 4) （訳註）2番目の理想と3番目の理想は、両者ともに自然環境を重視していることは共通している。しかし、前者は野生生物中心に自然環境を考え、後者は人間中心に自然環境を考えている点で真っ向から対立する。前者は、人間の居住領域をできる限り野生生物の生息地から離そうとするだろうし、後者の考える「森」は、あくまで人間にとって馴染みのある「自然」を想定している。つまり、「自然」に対する考え方、向き合い方が全く異なっていると理解し得る。
- 6) （訳註）ガストン・バシュラール（著）・岩村行雄（訳）『空間の詩学』（ちくま学芸文庫、2002）では51頁ならびに52-53頁に該当。本稿では、マーカス氏が原著論文で引用している英語版の当該箇所を新たに翻訳し直した。